2021 年 1 月 23 日

# ダンテ「神曲」読後感

山口光恒

今年初めからほぼ 1 ヶ月掛けて漸く読み終えたのを機に読後感を記す。

## 一般的読後感

何とか読み終えたというのが正直な感想。それにしてもダンテの知識・教養は見事なものだ。文化が栄えるところに偉大な人物が出ると言うが、ダンテが生まれたのは 1265 年、12~13 世紀に活躍したアッシジの聖フランチェスコの時代に揺籃期を迎えたルネッサンスが 14 世紀（クワトロチェント）に最盛期を迎える直前にフィレンツェを中心に活躍した。当時イタリアは世界の中心地でその地のインテリの代表的人物がダンテであった。

当時の世界最高のインテリとしてギリシャ・ローマに関する深い知識は言うに及ばないが、天文学、化学など自然科学的な要素がちりばめられており、当時の進んだ知識に一驚する場面がいくつもあった。

## 神曲の構成

神曲は地獄編 34 歌、煉獄編 33 歌、天国編 33 歌の 3 部構成でそれぞれの長さが均等に出来ている。地獄編の最上階には洗礼を受けていないものがいる辺獄でそこから肉欲の罪を犯したもの、大食いの罪を犯したもの、――― 暴力を用いたもの、裏切りを犯したものと言う具合に非道い地獄になっていく。煉獄は生前に懺悔したので地獄には落とされなかったが、生前の罪を清めるために止まっている場所、天国は地上を離れ、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星――――― 至高天の序列になっており、この至高天が最高の場所で、その最上段にはマリアがいる。

## キリスト教の世界

上記の通り、中心はあくまでキリスト教であり、死後天国・煉獄・地獄のどこに行くのかは全て信仰の深さに関わっている。ここで問題になるのはキリスト教以前の人物の評価である。この人々はどんなに徳が高く、優れた人でもキリスト教の信者では無いから神曲では地獄にいる。

訳者の平川氏は天国編第 20 歌の訳注で、キリスト以前の者が救われる可能性の有無はダンテを苦しめた問題としているが、この点小生も疑問である。例えばダンテの地獄と煉獄の案内人であるウェルギリウスはローマ時代の有名な詩人でダンテが先生と仰ぐ人物である

が、地獄の辺獄（天国行きでも地獄落ちでも無い場所）にいる。その理由は当然のことながらキリスト教信者で無いからである。煉獄編第 7 歌に「私はウェルギリウスだ、信仰が無かったから、他に罪は無かったが、天国を失った」とある。なお、地獄編第 2 歌の訳注に「キリスト教の洗礼を受けていない者は、たとえ徳のある人でも地獄へ落ちるが、ただ地獄としては一番上の辺獄にとどまる。それが天国行きでも地獄行きでもない人々なのである。神曲では、ここにはホメロス、シーザー、キケロ、ユークリッド、プトレマイオス、ソクラテス、プラトン、アリストレレスなどがここにいる。

では天国にどのような人（天使）がいるかであるが、その筆頭は既述の通りマリア、この他伝道者ヨハネやトーマス・アキーナスなどは順当なところだが、ここにダンテの嘗ての恋人ベアトリーチェがいて大変重要な役割を果たしているというのはちょっとやり過ぎでは無いか

上記とは別にキリスト教の究極は「愛」にあるということをダンテは言いたかったのではないかと思う。特に天国編を読み終えた今こう感じる。

## ダンテの基準と地獄に落とされた人物達

地獄編第 19 歌に聖職売買の廉で地獄で罰せられるローマ法王達が出てくる。地獄の穴に頭を突っ込んで足だけだしその足に火がついているのは元ローマ法王のニッコロ三世、そしていずれこの穴に落ちてくるボニファチオ八世などで、ここにはダンテの個人的な感情が移入されているように思う。ダンテ自身は一時はフィレンツェの指導者（国務大臣のような役職）であったのが政争に敗れ、最終的にここを追放されラベンナで客死した。こうした背景から随所に自分と反対の党派の人物（特に何人ものローマ法王）を地獄編に登場させている。反対にキリスト教初期の殉教者達はいずれも天国に迎えられている。

## 聖書の基礎知識の欠如

あちこちに聖書の引用があり、その意味を知らないと読んでいて意味がとれない箇所が多発する。小生はこの点が決定的に不足しているので、読み進めながら家内から新約と旧約聖書を借りてそれをつまみ食いした。例えばエステル記と言うのを初めて読みクセルクセスによってユダヤ人が迫害されるのを阻止したエステルとモルデカイの物語を知り、漸く神曲の該当場面を理解したような次第であった。しかしこの話は西洋ではかなり有名で、何人かの画家がこの場面を描いているのを知るとの副産物もあった。とはいえ全ての場面をこのようにして時間を掛けて読むわけにはいかず、その分は当然のことながら理解が浅いままで進まざるを得なかったのは残念であった。やはり聖書は西洋人の共通言語なのだと思う。

## 天国編のわかりにくさ

神曲のうちでは天国編がキリスト教の神学論争のようで非常に抽象的で分かりにくかった。キリスト教及び聖書の内容をよほど勉強した人で無いとこれを理解するのは困難なように見える。例えば

天国編第 11 歌 31 行
「あの声高の叫びを発した方が自ら祝福された
　血により縁を結ばれた新婦が
　さらに貞節な心をもち、安んじて
　愛する人の身許へ喜んで行けるよう、
　新婦のためを慮り、その左右に、
　二人の公子をつけて案内役を勤めさせた」
ここで訳注を見ると
　十字架上で大声を上げた人はキリストである
　新婦は教会である
　公子の一人はフランチェスコである
　他の一人はドミニコである

とある。これは脚注無しには絶対に分からない。また訳者の平川祐弘氏も原文の訳注無しにはこうしたことは難しいのでは無いか。読んでいると同様のことが実にたくさんある。昔の人の脚注にすがってやっと読める本である。こうした点がこの本を難解にしている。
また、天国編から格段に難しくなる。例えば第 2 歌の冒頭に
　「おお君たち小さな船にいる人よ
　　君たちは歌いつつ進む私の船のあとから
　　聴きたさのあまりついて来たが
　　君たちの岸を指して帰るがいい（下線山口）
　　沖合に出るな、君たちはおそらく
　　私を見失い、途方に暮れるにちがいない

この箇所の訳注で平川氏は、「地獄編と煉獄編の内容は描かれている対象が人間世界に実在する種々の相であるために、彼岸の世界との詩的設定にも拘わらず、読書は比較的容易である。しかし天国編には———神学的宇宙観に基づく論議が頻出し、且つ実世界との往復が無いもっぱら言語と想像力にたよって造られた詩作箇所が多いため———その読書は今日の人には決して容易ではない」としている。実際その通りで一度読んでもさっぱり分からず訳

者の注を読んでぼんやりと想像できる箇所がかなりあった。

## ダンテの能力

驚嘆するのはダンテの想像力と構成力、そして表現力だ。地獄編、煉獄編、天国編の 3 部合計 100 の章においてそれぞれそれに適した場面設定を行い、その制約の中で自分の言いたいことをいう。特に地獄編では過去の罪悪によってそこに縛り付けられている死者の様子が極めてリアルで、これを読んだ人は絶対に地獄にはいきたくないと思うこと必定だと感じる。やはりこのあたり優れた詩人の面目躍如である。

なお、天国編第 25 歌 18 行目にサンチアゴへの巡礼が出ている。

## 日本での神曲の受け入れられ方

日本で神曲を最初に紹介したのは森鴎外で、アンデルセンの即興詩人の訳の中でのことであるとのこと。ここで鴎外が神曲と呼んだのでそれ以後日本では神曲と呼ばれている。その後日本の知識人や作家がこれについて論じているが、訳者の度々の注釈を通して正宗白鳥が特に深く読み込んでいることを初めて知った。なお、末尾に夏目漱石が所蔵していたダンテの神曲（英語）への漱石の書き込み（地獄編第 3 歌の地獄の門の銘の和訳の写真があるのも興味深い。

## 訳者平川祐弘氏について

この本は訳者による詳細且つ親切な注釈が無い限り読破は困難である。翻訳はボッカチオのデカメロンと同じ平川祐弘氏で、一般の注釈以外に最後に平川氏の深い学識に基づいてダンテ及び当時のイタリアの都市国家、また、神曲の絵画に及ぼした影響、さらには日本の知識人の受け取り方などがまとめてあり、読者にとっては有り難い。また、内容に応じてカラー挿絵も多数挿入されており、見た目も楽しいものとなっている。

以上